

横田は、電話番号案内サービスに電話をかけるため、受話器を上げた。

「はい、一〇四の三浦です」

「もしもし、名古屋市内のニューグランドホテルの電話番号をお願いします」

「かしこまりました。名古屋ニューグランドホテルをご案内いたします。ありがとうございます」

電話番号の案内が流れてくると、横田は素早くメモにとり、ニューグランドホテルに電話した。

「はい、ニューグランドホテルでございます」

「お忙しいところ恐れ入ります。宿泊料金についてお聞きしたいのですが」

「それではフロントにおつなぎいたしますので、お待ち下さいませ」

「お待たせいたしました。フロントでございます」

「少々お尋ねいたしますが、そちらのシングルとダブルルームの宿泊料金を教えてくださいますか？」

「はい、シングルが一万七千円、ダブルが二万二千元でどちらも朝食付でございます」

予算より少し高いが仕方がないと思った横田は、

「そうですか。ではシングルの前約をお願いします。明日、二月二十二日より二泊で」

「申し訳ございません。あいにく、明日とあさってはシングルが満室となっております。ダブルでしたら一部屋お取りできますが」

横田は一瞬ためらったが、「ではダブルでお願いします」と答えた。

「ありがとうございます。では、お泊まりになる方のお名前とお電話番号をどうぞ」

「はい、山城薬品の野口雅彦です。電話番号は横浜〇四五―七三一―二四七七です」

「かしこまりました。では、山城薬品の野口雅彦様、二月二十二日と二十三日の二泊でダブルルームのご予約を承りました。私、予約係の武藤と申しますので」

「あ、私は、山城薬品の横田と申します。それではよろしくお願いします」

受話器を置いて一息ついたとたん、横田のダイレクトインが鳴った。

「はい、山城薬品の横田です」

「もしもし、野口ですけど」野口は横田と同じ課の先輩である。

「お疲れさまです。今、ちょうど野口さんの携帯に電話を入れようと思っていたんですよ」

「いいタイミングだな。で、明日からの名古屋出張の件だけど、ホテルの前約は済んだ？」

「はい、たった今。でもご希望の名古屋ビューホテルは満室で取れませんでした。その近辺でいろいろ探しましたがやっぱりほとんどが満室で、結局、ニューグランドホテルになりました。少し予算オーバーの二万二千元のダブルですけどよろしいですか？」

「ああ、いいよ。ありがとう。アシスタントの森口さんがお休みだから、横田君に頼んでしまつて悪かったね。今度、夕飯おごるよ。じゃあ、僕は今日はこのあと、有楽町のメディアカルセンターを訪問してノー・リターンだから」

「わかりました。では失礼します」

電話を切って腕時計を見るともう四時半。横田はホテルの前約騒動で中断していた見積書の作成に慌てて取りかかり、キーボードの上で指を走らせた。